インドネシアのアート・コレクティヴによる科学的実践の人類学的研究

Anthropological Research on Scientific Practices by Art Collectives in Indonesia

森口 武（京都大学大学院人間・環境学研究科）
MORIGUCHI Takeru（Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University）

本発表では、インドネシアのアート・コレクティヴによる活動にみられる科学的実践を科学人類学の視座から研究するための構想を提示する。

インドネシアの現代美術におけるアート・コレクティヴの活動は、特に 2010 年代から世界的な注目を浴びている。これらのコレクティヴをめぐる人類学的な研究では、主にその社会関与型アートとしての側面に焦点があてられてきた［廣田 2022］。その一方で、コレクティヴによる活動のなかには科学的実践として捉えることが可能なものが含まれており、例えば「芸術・科学・技術の領域で活動する市民団体」を活動指針とする Lifepatch や、非美術系大学出身の研究者で構成された KUNCI Study Forum & Collective（旧 KUNCI Cultural Studies Center）など、主にジョグジャカルタを拠点とする複数のコレクティヴが何らかの意味での学術研究活動を包含していることが先行研究でも示唆されている［廣田 2022］。しかしコレクティヴによるこれらの実践は、彼ら／彼女らのワートワールドにおける活動の後景に位置づけられ、活動の政治的な側面に関わる問題へと還元される傾向にあった。

そこで本発表では、このようなコレクティヴによる広義の科学的実践の過程そのものに焦点を当てた科学人類学的な研究を構想し、それがいかにして芸術活動をめぐるモノやシステムと関係しているのかを明らかにすることを目指す。今後の研究計画として、スマトラ島リアウ州を拠点とするコレクティヴや、上記のジョグジャカルタを拠点とする諸コレクティヴを対象とした研究の構想を提示する。

廣田緑. 2022.『協働と共生のネットワーク：インドネシア現代美術の民族誌』grambooks.